

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月10日現在

機関番号：11301  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21510252  
 研究課題名（和文）アメリカ合衆国の歴史系博物館における奴隷制の記憶の構築に関する研究  
 研究課題名（英文）Politics of Memory Construction of Slavery in U.S. History Museums  
 研究代表者  
 落合 明子（OCHIAI AKIKO）  
 東北大学・大学院国際文化研究科・准教授  
 研究者番号：30264831

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アメリカ合衆国の歴史系博物館の設立や運営、展示・教育プログラムの開発等において、奴隷制（人種）の問題がどのような影響を及ぼしているのかを、奴隷制の記憶の構築過程に注目しつつ検討したものである。事例として、国立黒人歴史文化博物館、ハーパーズ・フェリー国立歴史公園、コロニアル・ウィリアムズバーグ、チャールズ・H・ライト黒人史博物館を検討した結果、記憶構築における政治性の一端を時代の文脈の中に位置づけつつ明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

This research has focused on how the memory of U.S. slavery (race) affected the establishment and management of history museums as well as their development of exhibitions and educational programs. As case studies, this research examined the National Museum of African American History and Culture, the Harpers Ferry National History Park, Colonial Williamsburg, and the Charles H. Wright African American History Museum, and explored memory politics in their historical contexts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：アメリカ合衆国、歴史系博物館、記憶の構築、奴隷制、人種、アメリカ黒人

1. 研究開始当初の背景

アメリカ合衆国の黒人の歴史と文化を専攻する研究代表者は、過去十数年にわたり、奴隷制が廃止され、社会の再編が試みられた

南北戦争・再建期について、黒人の土地獲得運動を中心に据えて検討してきた。400万人にも及んだ解放奴隷は積極的に再建政策に関与し、土地獲得を「自由」の要と考え、血

のにじむような努力をした。しかしながら、再建政策は頓挫し、黒人の大多数は経済的自立を達成するまでには至らなかった。その後20世紀転換期までに人種分離制度が確立し、長期間にわたって黒人が二級市民の扱いを受けてきた結果、歴史学においても奴隷制時代および南北戦争・再建期の黒人の足跡は無視あるいは軽視されてきた。彼らの視点を取り入れた研究が本格的に始まったのは、市民権運動の成果が実際に政策や世論に反映されるようになった1970年代以降のことである。現在でも、地域性やジェンダー等の視点も取り入れた詳細な事例研究は行われている最中であり、研究代表者もそのような動向に沿って、解放奴隷が土地を通じて獲得しようとした「自由」とは何か、サウスカロライナ州の海岸部に焦点を当てて検討した。

こうした研究を進めるうちに、奴隷制時代や南北戦争・再建期の黒人の動向を、後世の人々や国家がどのように「記憶」してきたのかという課題に関心を抱くようになった。個人や共同体のアイデンティティ形成において記憶が重要な役割を果たしてきたことは、1980年代に指摘されて以来、歴史学のみならず、文学や心理学等でも広く認識されて久しい。そして、地域や国家等を単位とした集団的（公的）な記憶は、20世紀半ばまで、社会のあらゆる側面で圧倒的な力を握ってきた白人主流派が形成してきた。しかしながら、多文化主義が定着した現在のアメリカでは、黒人等のマイノリティ集団が、自らの記憶を取り入れた集団的な記憶の構築を求めている。その結果、教科書における記述から、映画における描写、議会での法案審議等、様々な分野において、記憶を巡る攻防が展開されている。それに伴い、そうした記憶の攻防を扱った研究も盛んに発表されるようになった。

以上の社会情勢と研究動向を受け、研究代表者は特に歴史系博物館と奴隷制の関係について関心を持った。なぜならば、奴隷制は、日本における太平洋戦争と同様に、アメリカ人の中で歴史認識が依然定まらず、その記憶を巡って論争が絶えない「歴史問題」であるからである。それ故、現在の人種問題にも影響を与えることが多く、奴隷制を巡る記憶の問題はアメリカ社会を分裂させる危険性を孕んでいる。さらに、いわゆる学術研究に従事する研究者が社会に貢献する可能性を探るという点においても、有意義な課題に思われたことが、本研究に着手した理由である。

## 2. 研究の目的

以上を研究の背景として、本研究の目的を、アメリカ合衆国の歴史系博物館の設立や運営、そして展示・教育プログラムの開発等において奴隷制の記憶を巡って展開される攻

防や、攻防の過程から新たに構築される記憶に注目し、その複雑な諸相や記憶構築の政治性を明らかにすることとした。歴史系博物館における奴隷制の展示や教育プログラムに関する研究は、現在までのところ、民族誌的な研究を主眼とする文化人類学や、博物館のあり方を実践的な視点から問う博物館学が主導してきた。他方、歴史学では、合衆国における奴隷制や人種の記憶の研究は、記念行事や記念碑等を中心に検討されてきた。黒人主導の博物館に関しては、黒人による政治的な運動の一部として博物館の設立運動や予算獲得運動を扱った論文があるのみで、最近の記憶研究の成果も取り入れた研究は手薄な状態にある。こうした研究動向を踏まえ、本研究では従来の研究よりも博物館の発展を歴史的な文脈で捉えると共に、奴隷制の学術的な研究が展示・教育プログラム等に及ぼしている影響を検討することを目指した。さらに、より多文化主義的な記憶の再構築を促す装置としての機能を歴史系博物館が果たしうるか、即ち「記憶の民主化」への博物館の貢献の可能性を探ることも課題とした。

## 3. 研究の方法

現在の歴史系博物館では、様々な集団がそれぞれの記憶を主張し、それらがぶつかり合うことで新たな記憶の構築が繰り返されている。記憶を巡る攻防は、展示や教育プログラムに留まらず、予算の充当、運営のあり方等、博物館の活動全般に及んでいる。奴隷制の記憶を巡る攻防も、アメリカ社会及び学術研究の変化と共に進展している。そうした様相を多角的に捉えることを目指し、設立の時期や目的（思想的な背景）等の違いから歴史系博物館を、(1) 国家の立場を代弁する博物館（国立歴史博物館）、(2) 伝統的に白人が運営してきた博物館（白人歴史博物館）、(3) 黒人の主張を代弁する形で発達してきた博物館（黒人歴史博物館）に分類し、その代表例として(1)では国立黒人歴史文化博物館（以下「国立黒人博物館」）及びハーバース・フェリー国立歴史公園（以下「HF 国立公園」）、(2)ではコロニアル・ウィリアムズバーグ（以下「CW」）、(3)ではチャールズ・H・ライト黒人史博物館（以下「ライト博物館」）を取り上げることとした。

3ヵ年にわたる研究期間の初年度であった2009年度には、歴史系博物館の研究、奴隷制の研究、そして記憶の研究の動向についての把握に努めた。その上で2009年度から2011年度にかけて、現地での資料収集および関係者への聞き取り調査を行った。

図書館（資料室）やプログラム等の担当者には事前に問い合わせを行い、計画を立てたが、実際に現地に赴くとHF国立公園とライト博物館では紛失や未整理で資料の存在を

確認できなかったり、CWでは内部関係者でないために結局閲覧できなかった資料もあった。入手できた資料や情報を基に、それぞれの博物館について設立の背景や運営方法、奴隷制に関連した展示や教育プログラムについての情報を整理・分析した。研究期間内に博物館のあらゆる側面を考察することは時間的に困難であったため、それぞれの博物館の特徴や課題を象徴的に示すものを抽出して検討した。最終年度にあたる2011年度の後半には、総括として、4館を比較しながら、民主的な記憶の再構築を促す記憶装置としての歴史系博物館の可能性を検討した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 国家の立場を代弁する博物館（国立歴史博物館）

黒人の間では、奴隷制に対する歴史認識（＝奴隷制を巡る記憶の構築）と彼らの地位改善を結びつけて考える傾向が強い。しかしながら、歴史認識の具体的な内容は是非以前に、そうした黒人による捉え方自体が、アメリカ世論のコンセンサスを必ずしも得ていない。この黒人と一般世論の認識のズレが表面化したのが、国立黒人博物館の設立法案を巡る連邦議会での審議であった。1980年代後半から90年代前半、設立法案は「我々黒人のために」という使命感を持った黒人を中心に推進された。推進者たちは、同博物館の評議会とスミソニアン協会理事会との関係、他の黒人博物館への経済支援、建設地等についての審議において、全国レベルの博物館を唱えながらも、「人種の牙城」建設のような側面を前面に打ち出した。結局、財政難と「文化戦争」の逆風にもさらされ、法案は可決に至らなかった。低迷期を経て、2003年に法案はようやく可決されたが、経済の好転や9・11以降の愛国主義の高揚に加え、黒人以外の推進者も加わり、人種が「和解する場」として同博物館が推されたことが要因であった。つまり、博物館の推進者が同博物館の設立目的を、黒人の集団的利益や自治の確保から、黒人の国家への貢献やアメリカ史に占める重要性の強調へと変化させ、それ沿った記憶を構築したことで、「アメリカ物語」を語る国家公認の場として博物館は容認されたと言える。こうした研究成果は、論文『『黒人物語』を語る場を求めて—国立博物館の建設地をめぐる記憶のポリテクス—』および『『人種の牙城』から『和解の場』へ—国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の設立—』として刊行した。

国立黒人博物館は2015年に開館予定で、まだ展示の具体的な内容についての検討はできない。そこで、奴隷制を武力の行使によって廃止しようとしたジョン・ブラウンによるハーパーズ・フェリー襲撃(1859年)の展示

に取り組んでいるHF国立公園について、シェパード碑を巡る論争を中心に検討した。同碑で記念されているのは、1859年の襲撃で最初の犠牲者となった自由黒人ヘイワード・シェパードであるが、建立したのは南部連合の娘たち連盟(UDC)であった。UDCは、南部連合国と戦前の南部の人種関係を賛美する「失われた大義(the Lost Cause)」思想を推進する団体である。UDCは、シェパードが同思想に忠実であったからこそ命を落とした、と主張した。同碑の建立当時から今日に至るまで、全国黒人地位向上協会(NAACP)等の黒人の権利推進派は同碑の撤去を要求し、UDCと対立している。他方、国立公園局は、1990年代に、両者の主張を併記する説明版を碑に設置することで、和解を試みた。と同時に、見学者にはフォーラムの場を提供しようとした。しかしながら、現在でもブラウンの評価（人種による不平等を武力によって打倒することに対する評価）が定まらない中で、ブラウンに関連した展示は最小限のものに抑えられている。結果的に、時代毎に構築された記憶の殆どが封印された状態にある。この事例は、記憶を民主化させる前の段階で重要に思われる作業—時の経過と共に再構築が繰り返され、折り重なるように刻まれた記憶を展示や教育プログラムに組み込む作業—の難しさを示しているだろう。この研究成果は、「ジョン・ブラウンとヘイワード・シェパード—記憶の継承／排除／隠蔽／忘却をめぐる—」として口頭発表をした後、論文“Continuing Skirmishes in Harpers Ferry: Entangled Memories of Heyward Shepherd and John Brown”としてまとめた。

##### (2) 伝統的に白人が運営してきた博物館（白人歴史博物館）

ウィリアムズバーグは、かつてヴァージニア植民地の行政府が置かれていた歴史あるタウンである。CWの施設自体は、1920年代にジョン・D・ロックフェラー・ジュニアが資金を投じて植民地時代末期の町並みの再現に着手したことに端を発する。開設以来、教育的でありながら市場のニーズに応じることをCWは重視してきた。現在では、参加型の野外博物館と展示博物館、宿泊やレジャー施設等からなる複合施設にまで発展している。忠実に再現された町並みや建物を見学できる点と、当時の人物に扮した「生きた解説者」や時代背景を説明してくれるガイドと自由に交流できる点に、同博物館の最大の特徴がある。つまり、歴史系博物館が最近になり重視し始めた「語り」を通じた歴史の提示を、長年にわたり行ってきたのである。

とはいえ、1970年代までは、白人男性中心でアメリカの体制の称賛を基調とする主流派の歴史観を反映し、CWでも黒人や女性の視

点はほぼ無視されていた。アメリカ社会に多文化主義がより浸透した 1980 年代以降になり、奴隷（制）の教育プログラムに加え、黒人の「生きた解説者」やガイドが導入された。それ以降、徐々に黒人関連の建物（区画）も整備され、現在では中心部からやや離れた一面にプランテーションが再建されている。こうした工夫の積み重ねの結果、植民地時代末期のウィリアムズバーグでは人種や身分、ジェンダーによって置かれていた状況が多様であったことや、様々な人々の間で起こった対立や交渉を通じて独立革命が進行したことが提示されるようになった。ただし、当時の黒人人口は実際には全体の約 5 割を占めていたにも拘らず、現在の CW の黒人の解説者やガイドは 1 割程度に過ぎない。運営権を握る理事会は依然白人が多数を占め、扱われるトピックも見学者の大多数であるミドルクラス以上の白人の嗜好に沿ったものが多い等の課題もある。

加えて、パフォーマンスに重点を置く CW ならではの課題も見られる。黒人関連の施設や区画に配置される「生きた解説者」やガイド（殆どは黒人）は、学術研究の成果を踏まえて、奴隷や自由黒人の立場から当時の暮らしぶりを語ったり、実演をしたりする。例えば、1994 年には奴隷競売の場面が再現された。こうした実演には通常の展示よりも見学者の感情に訴える力があるが、特にこの奴隷競売では、人種を問わず見学者が困惑したり、奴隷商人を演ずる者に罵声を浴びせたりした。NAACP 等からは、トピックの適正について批判を浴びた。奴隷を演じたスタッフの精神的なストレスも相当なものであったという。最近の歴史系博物館はフォーラムの機能を果たすことを目指しているが、見学者の心に直接的に訴え、トピックについて考えることを促す力がある実演は、非常に有効な手段であるように思われる。その一方で、奴隷競売の事例で起こったような問題を最小限に抑えるには、学術研究の成果をそのままストレートに表現するのではなく、見学者や演技者に与える影響や現代社会の人種関係等を運営側が慎重に考慮する必要がある。現在の CW も、当時さながらに演じられる出来事を見ながらも、見学者が少し距離を置いた視点からそれらに評価を下せるような工夫をしている（例えば、鞭打ちの説明では、ガイドは木の幹を鞭で打って、あとは見学者の想像に任せている）。今後は、今日の視点や学術的な視点から補足説明をするガイド役が、より重要な役割を担うようになって考えられる。そして、どのような奴隷制の記憶に重点を置くか等の問題がより大きな課題となるだろう。以上の検討に加え、「生きた解説者」の役割や効果については、パフォーマンス研究での成果も取り入れて、下記のライト博物館と

対比させつつ、研究成果をまとめる予定である。

(3) 黒人の主張を代弁する形で発達してきた博物館（黒人歴史博物館）

ライト博物館は、主流の歴史系博物館における表象から黒人が排除されていたことに抗議し、市民権運動家でもあった黒人医師チャールズ・H・ライトが、私財を投じて 1965 年に設立した展示室を前身とする。1970 年代以降にデトロイト市で黒人が政治力を強め、多文化主義がアメリカ社会に浸透するようになる、同博物館は市から多額の助成金を受けようになり、改修や増築を繰り返した。1997 年には、黒人史に特化した博物館としてはアメリカで最大規模を誇る建物が建築され、それを機に展示内容も拡充された。このような同博物館の歩みは、20 世紀後半にマイノリティの政界での躍進に比例して、彼らを表象する文化施設が増加したことを示す好事例である。

とはいえ、助成金を巡り、他の博物館と確執もあり、それが人種（エスニック）集団間の対立の様相を帯びる場合もある。確執の背景には 1990 年代に激化した「文化戦争」があるが、設立以来黒人が主導権を握り、独自の視点から同博物館の運営や展示をしてきたこともある。例えば、アメリカ黒人の歴史を網羅している常設展「人々について—アフリカ系アメリカ人の経験」は、展示全体が「私たち」という二人称で語られる。「私たち」はアメリカ人でも、デトロイト市民でもなく、「アフリカを故郷とする（アメリカ）黒人」のことである。人種や国籍を問わず、見学者はそうした人々の視点から見ると前提の下で展示は組まれている。ハイライトは、アフリカの内地で奴隷商人に捕獲され、海岸沿いにあった収容施設から奴隷船に乗せられて新大陸に着くまでの行程をたどる「中間航路」の疑似体験で、等身大の人形が横たわる奴隷船の船底の模型は臨場感溢れる。ただし、説明の基調は、奴隷貿易を担った国々や集団への非難や、屈辱的な体験に感じる羞恥ではなく、過酷な航海やその後の奴隷制に屈しなかった「私たち」の強靱さの賞賛である。

こうした展示のあり方は、祖先の歴史を知ることを通じて黒人が自尊心を持つことを願ったライト医師のブラック・ナショナリズム的な理念の継承であると同時に、大西洋圏に拡散したアフリカ系の人々の文化的・精神的な連帯を訴えるブラック・ディアスポラの思想を取り込んだものと言える。ただし、礼賛型であるために、奴隷貿易や奴隷制が黒人に及ぼした否定的な側面についての説明は殆どない。黒人貧困層や労働者層の闘い、急進的な運動、黒人内の多様性等への言及も少なく、人種主義の社会構築性等についても、

説明は不十分である。そのため、展示から読み取れる「(アメリカ) 社会で力強く前進する黒人」は、黒人の活躍や強靱さの提示を求める黒人側の主張とアメリカ社会に統合される黒人像を求める白人主流側の主張を折衷した記憶に過ぎない、との批判もある。

20世紀後半以降、国立歴史博物館や白人歴史博物館でもマイノリティの歴史文化が展示・教育プログラムに取り入れられるようになった。しかしながら、それらの博物館では、主流の「アメリカ物語」にマイノリティの物語が統合吸収される形の記憶が提示されることが少なくない。本事例は、黒人歴史博物館が独自性を保ち、他の博物館との差異化を図りながらも、いかに礼賛型を越えた展示・教育プログラムを開発するかという課題を示している。

本研究では、4つの歴史系博物館を調査し、設立時の経緯や伝統、そして今日に至るまでの思想的な立場が、それぞれの博物館の現在のあり方に影響を及ぼしていることを示した。そうした歴史的な文脈の検討を踏まえた上で、奴隷制という「負の遺産」の記憶を巡って、歴史系博物館の様々なレベルで展開されている政治的な攻防の一端を明らかにした。記憶の攻防が国立博物館の設立を大きく左右したり、一般市民を巻き込んだ大論争に発展した事例もあり、奴隷制を巡る記憶が社会に与える影響や、そうした記憶の構築作業を中心的に担う歴史系博物館の責任の重さを示しているだろう。全体の傾向として、20世紀後半にアメリカ社会が多文化主義の方向に転換したことを受け、奴隷制を取り入れた展示や教育プログラムはいずれの博物館でも拡充された。実演やフォーラム型の展示等、新しい提示方法も開発されている。奴隷制の記憶が無視・軽視されていた以前の時代と比べれば、こうした多様化を通じて「記憶の民主化」は、着実に進行していると言えるだろう。

他方、共通した課題として、奴隷制の記憶が、学術研究の進展やアメリカ世論の変化と密接に関係しながら歴史的に再構築されてきたことを、見学者にいかん提示するかという問題があることが分かった。この問題への対処状況は博物館によって異なるが、比較的に取り組んでいる博物館においても、解決策は模索段階にある。よって、過去の記憶を脱構築しつつ、様々な人々の主張を束ねながら記憶の再構築を図るという意味での「記憶の民主化」は進展しておらず、博物館もそれを促す装置としての機能を十分に果たしているとは言えないだろう。とはいえ、歴史系博物館の多くが、見学者も巻き込んだフォーラムとして機能することを現在では目指している。時間はかかるかもしれないが、記憶が構

築されてきた過程(記憶の歴史)をより積極的に見学者に示し、単なる紹介や礼賛を越えた展示や教育プログラムを提供する方向に、歴史系博物館は向かっているだろう。そうした実践的な模索を通じて、奴隷制を巡る「記憶の民主化」も進展するものと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1. 落合明子、「黒人物語」を語る場を求めて—国立博物館の建設地をめぐる記憶のポリテクス—、国際文化研究科論集、査読有、17号、2010年、15-29
2. Ochiai, Akiko, Continuing Skirmishes in Harpers Ferry: Entangled Memories of Heyward Shepherd and John Brown, Japanese Journal of American Studies, 査読有、23号、印刷中

[学会発表](計1件)

1. 落合明子、ジョン・ブラウンとヘイワード・シェパード—記憶の継承/排除/隠蔽/忘却をめぐる—、南部史研究会、2010年6月27日、東北大学

[図書](計1件)

1. 落合明子、「人種の牙城」から「和解の場」へ—国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の設立—、肥後本芳男・小野沢透・山澄亨編、昭和堂、『アメリカ史のフロンティアⅡ 現代アメリカの政治文化と世界—20世紀から現代まで—』、2010年、210-234

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

落合 明子 (OCHIAI AKIKO)

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授  
研究者番号：30264831

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：